

「山東省クルーズ」 (青島・済南・泰山・曲阜)

雑感

坂和 章平

〈山東省クルーズとは？〉

法苑一二七号の「西安・敦煌旅行記」、同一四〇号の「坂和的台湾旅行と日台・台中・日中問題を考える」に続く私の今回の旅行記(雑感)は、〇五年一〇月二〇〜二四日の山東省クルーズ。中国大陸上の旅だからクルーズという言葉には少し違和感があるが、それは東から西(青島から済南)へ、そして北から南(済南から泰安・曲阜)へ大きく延びる高速道路を走るため。九〇年に開通した青島と済南を結ぶ済青高速道路四〇〇kmをはじめ、済南から泰安へ八〇km、泰安から曲阜へ七〇kmなど、山東省における高速道路の整備は中国一。この高速道路で結ばれた各地をめぐる山東省クルーズの総走行距離は一四〇〇km。大阪〜東京(五五〇km)を往復する以上の距離だ。今回のツアー参加者は一三名。例によって(?)快晴に恵まれた、勉強心と遊び心いっぱい旅行の雑感を。

〈一山(さん)、一川(せん)、一聖人とは？〉

これは、泰山と黄河そして孔子を表わす言葉。この三つがすべて備わっているのが山東省の自慢というわけだ。また、今回の旅で何回も聞いた言葉は、「万里の長城に登らなければ一人前の男になれない。黄河を見ていなければ落ち着かない。泰山の山頂に至らなければ英雄ではない」と

いう言い伝え。お国自慢と言ってしまうはそれきりだが、見栄っ張りな中国人の気質が見えて面白い・・・?

〈泰山への登頂は岱廟から〉

岱廟(たいびょう)は、北京の故宮、曲阜の孔子廟と並び中国三大廟のひとつで、約千年前の北宋時代に拡張された敷地と建物が現在の岱廟の基になっており、九・六kmという広大なもの。この岱廟は秦の時代に天の神を祀る場所として創建されたもので、歴代皇帝の多くがここを訪れている。それは、ここで「封禪の儀式」を済ませるまでは皇帝と見なされなかったためだ。岱廟の入口は正陽門。そこから南北の中軸線上に配天門、仁安門と続き、メインは天祝殿(てんきようてん)。

〈気分はまるで皇帝さま〉

天祝殿の手前には、「漢柏」や「第一山」と刻まれた刻石がある。そして、ある建物の中では、皇帝の衣装を着て冠をかぶり、皇帝の座(?)で写真撮影をする商売も。貸衣装で写真撮影をするサービス



写真① 皇帝になった坂和弁護士
05年10月

は観光地が多いが、皇帝の座に座つての写真撮影は珍しい。一〇元だと聞いた私は、尻込みするツアー客に率先して手を挙げ、この衣装を身につけることに。始皇帝も同じ道をたどった「あの時代」に夢を馳せながら、黄色い衣装に身を包み、赤い冠をかぶり玉座に座つて微笑めば、気分はまるで皇帝さま・・・(写真①)。

〈中国に五岳あり!〉

五岳とは、①湖南省の衡山(南岳)、②河南省の嵩山(中岳)、③陝西省の華山(西岳)、④山西省の恒山(北岳)、そして⑤山東省の泰山(東岳)。

泰山はBC二一九年に秦の始皇帝が「封禪の儀式」を行つたため、それ以降「聖なる山」とされ、その頂上から拝む御来光は多くの中国人のあこがれ。泰山は、七四一二段の石段と全長九kmの道のりを自分の足で登るのが理想。時間的には六〜七時間かかるが、多くの中国人はそれが楽しみなのだ。さらに望ましいのは、頂上近くで一泊して、泰山の頂上から早朝に東から昇る御来光を拝むこと。泰山を訪れる多くの信篤い中国人は、この日の出を拝むために泰山登山を願っているわけだ。今日のような快晴の日ほそれに絶好!しかしツアー旅行ではそうはいかず、まずはバスでロープウェイ乗り場を目指すことに。登山には中路と

西路があり、中路が昔からの参道で一般的。そしてロープウェイも中路と西路があるが、私たちは一番距離の長い西路のロープウェイで一路南天門まで。

〈七〇〇段の石段に挑戦〉

南天門から石段を少し登つていくとすぐ天街がある。ここには、一泊して御来光を拝む人たちのためのホテルやレストランがたくさん並んでおり、天街坊という大きな牌坊もある。南天門から頂上までは約七〇〇段の石段で、その途中には碧霞祠や青帝宮などたくさん見どころも。この石段を登るのは年配者にはかなりきついが、日頃フィットネスで足腰を鍛えている私は元気なもの。石段は二段ずつ登り、下山はほとんど駆け足状態。もつともそうせざるをえないのは、所要所要でのカメラとデジカメ撮影が山ほどあるからで、そんな状況は〇三年の北京旅行の際、汗をふきふき「万里の長城」を上り下りした時と全く同じ。泰山の山頂は海拔一五四五mの玉皇頂

海抜一五四五mの玉皇頂



写真② 泰山玉皇頂(1545m)にて
05年10月

(写真②)。ここには玉皇殿があり玉皇大帝が祀られているが、時間に追われる私たちはお参りもホドホドにすぐに下山。

〈泰山VS華山〉

ここで思い出したのが、〇一年八月の西安・敦煌旅行の時、半日かけて登つた華山。華山も北峰のふもとまではロープウェイがあり、一六一四mの北峰の頂上までは徒歩で約四〇分だったが、そこから東峯や南峯まで歩くのは大変だった。南峯の頂上は二一六〇m。そこを目指して汗をふきふき、自分の足で一段一段石段を登つたため、頂上に達した時の感激はひとしおだった。中国の五岳のうち、陝西省の華山と山東省の泰山の二つを征服した日本人は少ないはず。これ、自慢の種がまた一つ増えたというものだ・・・(写真③)。



写真③ 華山南峯(2160m)にて
01年8月

〈曲阜の見どころは三孔〉

日本人ツアーの曲阜観光は、ホテル闕里賓舎に泊まり、孔廟・孔府・孔林の「三孔」見学と相場が決まっているが、これはどのガイド本にも詳しい説明があるので省略。歴史上の物語として面白いのが周の公廟で、これは周の武王の弟である周公旦(こうたん)のお墓。彼は周の文王の後を継いだ武王が周王朝の基礎を築くのに大いに貢献し、武王の甥の成王を輔佐して国内の政治体制を整えた人物。また魯の国は、この周公旦が曲阜に封じられたことに始まること。

〈七五代目は孔祥濤くんだが・・・?〉

孔子が生まれたのはBC五五一年。孔子ゆかりの曲阜のまちが有名なのは、人口五万人のうち一〇万人が孔姓を名乗っているため。孔子一族の繁栄能力(生殖能力?)には、ただビックリ!至聖林という門をくぐると、そこに孔子のお墓がある。私たちがここで目にしたのは地べたに座つて紙に絵を描いている一人の若者。説明によると、彼は孔子七五代目の子孫で孔祥濤くん。絵は一枚千円で販売しているので二枚買ひ、並んで記念撮影を。彼はテレビでも取り上げられており、名刺ももらったのでインキキではな

いと思うのだが、私が読んだガイド本(『地球の歩き方』)

には、「前堂楼は、第七六代目の子孫で衍聖公の孔令貽の妻子が住んでいた場所。後堂楼は、第七七代目の孫で衍聖公の孔徳成の住宅であった」と書かれていたから、何となくつじつまが合わない感じも・・・?さらに、帰国後読んだ一〇月二三日付朝日新聞は、「世界一長い家系図」として孔子の家系図がギネスブックに認定されたことを報じたが、そこには「孔子の子孫は現在まで八二代にわたる」と書かれていた。だとすると、七五代目の孔祥濤くんは・・・?

〈「黄色い大地」と黄河〉

長江流域は現在の中国の発展を支える生命線だが、黄河流域は世界四大文明の一つである黄河文明発祥の地。中国では氾濫をくり返す黄河を治めることが王たるものの第一条件。泥の河と云つては失礼だが、黄河の泥の含有率はナイル河の何と二・三倍とのこと。世界に衝撃を与えた陳凱歌監督の『黄色い大地』(八四年)は中国陝西省北部の田舎を舞台にした恋物語だが、濁流うず巻く黄河を渡るのは命がけ!目の前に広がる今はたおやかに流れる黄河を遊覧船の中からじっくり見学しながら、私の想いはさまざまに・・・。

〈青島ビール雑感〉

青島は一八九八年にドイツの租界とされた美しいまち。また済南・泰安・曲阜は古い歴史を誇る都市だが、青島はわずかに一〇〇年の近代都市。そして夏涼しく冬暖かいリゾート地青島は、今や中国人の人気No.1。その見どころはいっぱいだが、今回は小魚山公園と天主教堂そして〇三年に百周年を終えた青島ビール工場の見学のみ。青島ビールがいかにか有名かは〇〇年八月の大連旅行ではじめてわかったが、その後の中国旅行でも飲んだビールはほとんどがコレ。

〈「ナイトクラブ」イン青島・・・?〉

ツアー最後の夜は、私の八回目の中国旅行ではじめてのナイトクラブへ繰り出しているカラオケの熱唱。こんな企画が実現したのは、青島で商売をしているツアー仲間と親しくなれたおかげ。カラオケ自慢の私が歌うのは、中国語曲十八番のテレサ・テンの『月亮代表我的心』やさまざまなハングル語バージョン、そして『昂』をはじめとする新旧数々の日本語。若く美しいホステスさんに囲まれて興に乗る中、青島の夜は足早に更けていったのでありました。大阪の北新地なら、さしずめお一人様二万円というところが、さて青島ではHOW MUCH?

〈君は「ハイアール」を知っているか?〉

他方、自称映画評論家の私がおすすすめしたい映画が、青島で生まれ今や「中国経済の巨人」企業となったハイアールと、その社長張瑞敏(チャン・ルエミン)を描いた感動作『CEO(最高経営責任者)』(〇二年)。中国の製品に